

糖尿病

●通常、血液中の糖分(血糖値)は、インスリンというホルモンの作用で一定に保たれています。糖尿病では、その血糖値を一定に保つシステムがうまく作用しないため、高血糖の状態が続きます。高血糖になると、腎臓で濾過した糖分を再び吸収するという働きが間に合わなくなるため、結果として尿中に糖分が出現するようになります。

●インスリンは、血糖値を下げるホルモンです。ごはんを食べて消化された糖分は、細胞のエネルギー源になります。インスリンは、血液中の糖分を細胞に取り込むための、ドアを開ける鍵のような働きをしています。この働きがうまくいかないと細胞に糖分が取り込まれなくなり、高血糖状態となってしまいます。

原因

●体内でインスリンが、うまく働かない原因は、大きく2つに分けられます。

①インスリンが欠乏している場合(インスリン依存性糖尿病;IDDM)

②細胞のインスリンに対する感受性が低下している場合(インスリン非依存性糖尿病;NIDDM)

◆犬では、インスリンを分泌する膵臓が破壊されてインスリンが産生されない、①の状態(インスリン依存性糖尿病)が、原因として多くみられます。

◆猫では、肥満や薬物、膵島アミロイドーシス、甲状腺機能亢進症、慢性膵炎などが原因となり、インスリンは分泌されているが、効きが悪い②の状態(インスリン非依存性糖尿病)で糖尿病になることが比較的多いです。

症状

●高血糖の状態が続くとさまざまな症状が見られます。一般的に、多飲多尿、多食、体重減少などがみられます。細胞に糖分が送られないことで、細胞は飢餓状態に陥ります。これにより食欲は増しますが、吸収されないのでどんどん痩せてしまうのです。

●体内で糖分が吸収されないため、脂肪を分解して糖分を作り出すようになると、糖尿病性ケトアシドーシスという状態になります。

●進行すれば、白内障や肝疾患、腎疾患を併発したり、脱水や削瘦が進み、重症になると昏睡状態から死に至ることもあります。

診断

●診断は、血糖値の測定、尿検査による尿糖の出現、血中の糖化アルブミンやフルクトサミンの測定などでおこないます。一般に血糖値は食後高く、空腹時は低くなり、1日の中で変動します。糖化アルブミンやフルクトサミンの値は、過去2～4週間の平均血糖値を反映するので、長期的な指標になります。

●尿検査でケトン体が検出されれば、糖尿病性ケトアシドーシスが確定されます。

●その他、副腎皮質機能亢進症や細菌性膀胱炎(糖尿だと細菌が繁殖しやすい為なりやすい)、感染症などの併発がないか検査し、それらの治療を行うことも大切です。

治療

◆犬の場合、多くは、インスリン依存性糖尿病なので、インスリンを注射で補充して血糖値をコントロールすることが、治療の基本になります。完治させることは難しい場合が多いですが、うまく病気と付き合って管理していくという、飼い主さんの姿勢が大切です。

●まずは、病院でお預かりして、血糖値をコントロールできるインスリンの適正量を調べます。

●その後は、家庭で毎日1回、あるいは2回のインスリンを注射してもらうのと同時に、尿試験紙で尿糖やケトン体のチェック、飲水量のチェック、食事管理などを、おこなってもらいます。

●毎日、それらの結果を記録して、きちんとコントロールできていることを確認し、管理していくことが大切です。

●定期的に病院で検診を行い、血糖値、糖化アルブミンやフルクトサミンの測定、尿の検査などを行います。

◆猫の場合、比較的、インスリン非依存性糖尿病が多いですが、その場合も、はじめはインスリンの注射を使います。同時に、食事療法、経口血糖降下剤等を用いて治療を行い、改善されれば、インスリンの投与が必要なくなることもあります。また、原因となる基礎疾患があれば、その治療も行います。

